

## 校異源氏物語・をとめ

としかはりて宮の御はてもすきぬれは世中いろあらたまりてころもかへのほと  
なともいまめかしきをましてまつりのころはおほかたの空のけしき心ちよけな  
るに前さい院はつれくとなかめ給をまへなるかつらのしたかせなつかしきに  
つけてもわかき人くはおもひいつることゝもあるに大殿よりみそきの日はい  
かにのとやかにおほさるらむとゝふらひきこえさせ給へりけふは

かけきやはかはせのなみもたちかへり君かみそきのふちのやつれをむらさ

きのかみたてふみすくよかにてふちの花につけ給へりおりのあはれなれば御返  
あり

ふちころもきしはきのふと思ふまにけふはみそきのせにかはる世をはかな

くとはかりあるをれいの御めとめ給てみをはす御ふくなをしのほとなどにもせ  
んしのもとに所せきまておほしやれることゝもあるを院はみくるしきことにお  
ほしの給へとをかしやかにけしきはめる御ふみなどのあらはこそとかくもきこ  
えかへさめとしころもおほやけさまのおりくの御とふらひなどはきこえなら  
はし給ていとまめやかなれはいかゝはきこえもまきらかすへからむともてわつ  
らふへし女五宮の御かたにもかやうにおりすくさすきこえ給へいとあはれに  
この君のきのふけふのちこと思ひしをかくおとなひてとふらひ給ふことかたち  
のいともきよらなるにそへて心さへこそ人にはことにおひいて給へれとほめき  
こえ給をわかき人くはわらひきこゆこなたにもたいめんし給おりはこのおと  
ゝのかくいとねんころにきこえ給めるをなにかいまはしめたる御心さしにもあ  
らすこ宮もすちことになり給てえみたてまつり給はぬなけきをし給てはおもひ  
たちしことをあなちにもてはなれ給しことなどの給ひいてつくやしけにこ  
そおほしたりしおりくありしかされとこ大殿のひめ君ものせられしかきりは  
三宮の思ひ給はむことのいとをしさにとかく事そへきこゆることもなかりしな  
りいまはそのやむことなくえさらぬすちにてもせられし人さへなくなられに  
しかはけになどてかはさやうにておはせましもあしかるまじとうちおほえ侍に  
もさらかへりてかくねんころにきこえ給もさるへきにもあらんとなむ思ひ侍な  
といとこたいにきこえ給を心つきなしとおほしてこ宮にもか心こはきものに

おもはれたてまつりてすき侍にしをいまさらにまた世になひきはへらんもいとつきなきことになむときこえ給てはつかしけなる御けしきなれはしゐてもえきこえおもむけ給はす宮人もかみしもみな心かけきこえたれは世中いとしろめたくのみおほさるれとかの御身つからは我心をつくしあはれをみえきこえて人の御けしきのうちもゆるはむほとをこそまちわたり給へさやうにあなかななるさまに御心やふりきこえんなどはおほさゝるへし大殿はらのわか君の御けんふくのことおほしいそくを二条の院にてとおほせと大宮のいとゆかしけにおほしたるもことはりに心くるしければなをやかてかの殿にてせさせたまつり給右大將をはしめきこえて御をちの殿はらみなかむたちめのやむことなき御おほえことにてのみのし給へはあるしかたにも我もくどさるへきことゝもはとりくにつかうまつり給おほかた世ゆすりて所せき御いそきのいきおひなり四ゐになしてんとおほし世人もさそあらんとおもへるをまたいときひはなるほとをわか心にまかせたる世にてしかゆくりなからんも中くめなれたることなりとおほしとゝめつあさきにて殿上にかへり給を大宮はあかすあさましきことゝおほしたるそこはりにいとをしかりける御たいめんありてこの事きこえ給にたゝいまかうあなかにしもまたきにいつかすましう侍れと思ふやう侍て大かくのみにしはしならはさむのほい侍によりいま二三年をいたつらのとしに思ひなしてをのつからおほやけにもつかうまつりぬへきほとにならはいま人となり侍なむ身つからはこゝのへのうちにおいゝて侍て世中のありさまもしり侍らすよるひる御前にさふらひてわつかになむはかなきふみなどもならひ侍したゝかしこき御てよりつたへ侍したになにこともひろき心をしらぬほとはふみのさへをまねふにもことふゑのしらへにもねたえすをよはぬ所のおほくなむ侍けるはかなきおやにかしこき子のまさるためしはいとかたきことになむ侍れはましてつきくつたはりつゝへたゝりゆかむほとの行さきいとしろめたなきによりなむ思ひ給へをきて侍たかきいへの子としてつかさかうふり心になひ世のなかさかりにをこりならひぬれはかくもむなど身にくるしめむことはいとゝをくなむおほゆへかめるたはふれあそひをこのみて心のまゝなる官爵にのほりぬれはときにしたかふ世人のしたにはゝなましろきをしつゝついせうしけしきとりつゝしたかふほとはをのつから人とおほえてやむことなきやうなれとときうつりさるへき人にたちをくれて世おとろふるすゑには人にかかるめあなつらるゝにとるところなきことになむ侍なをさえをもとゝしてこそやまとたましひの世にもちゐらるゝかたもつよう侍らめさしあたりては心もとなきやうに侍れと

もつゐの世のおもしろとなるへき心をきてをならひなは侍らすなりなむのちもう  
しろやすかるへきによりなむたゝいまははか／＼しからすなからもかくてはく  
ゝみ侍らはせまりたる大かくのしうとてわらひあなつる人もよも侍らしと思ふ  
給ふるなときこえしらせ給へはうちなけき給てけにかくもおほしよるへかりけ  
ることをこの大将などもあまりひきたかへたる御ことなりとかたふけはへるめ  
るをこのおさな心ちにもいとくちおしく大将左衛門督の子ともなをわれより  
は下らうとおもひおしたりしたにみなをの／＼かゝいしのほりつゝおよすけ  
あへるにあさきをいとからしとおもはれたるに心くるしく侍なりときこえ給へ  
はうちわらひ給ていとおよすけてもうらみ侍なゝりないとはかなしやこの人の  
ほとよとていとうつくしとおほしたりかくもんなどしてすこしものゝ心え侍ら  
はそのうらみはをのつからとけ侍なるときこえ給あさなつくることはひむかし  
の院にてしたまふひんかしのたいをしつらはれたりかむたちめ殿上人めつらし  
くいふかしきことにして我も／＼とつとひまiori給へりはかせともゝ中／＼お  
くしぬへしはゝかる所なくれいあらむにまかせてなたむる事なくきひしうをこ  
なへとおほせ給へはしいてつれなく思ひなしていへよりほかにもとめたるそう  
そくどものうちあはすたくなしきすかたなどをちはちなくおもゝちこはつか  
ひむへ／＼しくもてなしつゝ座につきならひたるさほうよりはしめみもしらぬ  
さまともなりわかきゝんたちはえたへすほうゑまれぬさるはものわらひなどす  
ましくすくしつゝしつまれるかきりとえりいたしてへいしなともとらせ給へ  
るにすちことなりけるましらひにて右大将民部卿などのおほな／＼かはらけと  
り給へるをあさましくとかめいてつゝをろすおほしかいもとあるしはなはたひ  
さうに侍りたうふかくはかりのしるしとあるなにかしをしらすしてやおほやけ  
にはつかうまつりたうふはなはたおこなりなといふに人ゝみなほころひてわら  
ひぬれはまたなりたかしなりやまむはなはたひさう也さをひきてたちたうひな  
んなとをとしいふもいとおかしみならひ給はぬ人ゝはめつらしくけうありと  
おもひこのみちよりいてたち給へるかむたちめなどはしたりかほにうちほゝゑ  
みなどとしつゝかゝるかたさまをおほしこのみて心さし給かめてたきことゝいと  
ゝかきりなくおもひきこえ給へりいさゝかものいふをもせいすなめけなりとて  
もとかむかしかましようゝしりをるかほとゝ夜にいりては中／＼いますこし  
けちえんなるほかけにさるかうかましくわひしけに人わるけなるなとさま／＼  
にけにいとなへてならすさまことなるわさなりけりおとゝはいとあされかたく  
なゝる身にてけうさうしまとはかされなんと給てみすのうちにかくれてそ御

らむしけるかすさたまれる座につきあまりてかへりまかつる大かくのしうともあるをきこしめしてつり殿のかたにめしとゝめてことにもなとたまはせけりことはてゝまかつるはかせさい人ともめしてまたくゝふみつくらせ給かむたちめ殿上人もさるへきかきりをはみなとゝめさふらはせ給はかせの人くゝは四ゐんたゝの人はおとゝをはしめたてまつりて絶句つくり給興ある題のもしえりて文章博士たてまつるみしかきころの夜なればあけはてゝそかうする左中弁かうしつかうまつるかたちいときよけなる人のこはつかひものくゝしく神さひてよみあけたるほとおもしろしおほえ心ことなるはかせなりけりかゝるたかきいゑにむまれ給てせかいのゑい花にのみたはふれ給へき御身もちてまとのほたるをむつひえたの雪をならし給心さしのすくれたるよしをよろつのことによそへなすらへて心くゝにつくりあつめたるくことにおもしろくもろこしにももてわたりつたへまほしけなる夜のふみともなりとなむそのころ世にめてゆすりけるおとゝの御はさらなりおやめきあはれることさへすくれたるを涙おとしてすしさわきしかと女のえしらぬことまねふはにくきことをとうたてあれはもらしつうちつゝきにうかくといふことせさせ給てやかてこの院の内に御さうしつくりてまめやかにさえふかき師にあつけきこえ給てそかくもんせさせたてまつり給ける大宮の御もとにもおさくゝまうて給はすよるひるうつくしみてなをちこのやうにのみもてなしきこえ給へればかしこにてはえものならひ給はしとてしつかなる所にこめたてまつり給へるなりけり一月に三たひばかりをまいり給へとそゆるしきこえ給けるつともりゐ給ていふせきまゝに殿をつらくもおはしますかなかくくるしからてもたかきくらゐにのほり世にもちゐらるゝ人はなくやはあると思きこえ給へとおほかたの人からまめやかにあためきたる所なくおはすれはいとよくねんしていかてさるへきふみともとくよみはてゝましらひもし世にもいてたらんと思てたゝ四五月のうちに史記などいふふみよみはて給てけりいまは寮試うけさせむとてまつ我御まへにて心みさせ給れいの大將左大弁式部大輔左中弁などはかりして御師の大内記をめして史記のかたきまきくゝれうしうけんにはかせのかへさふへきふしくゝをひきいてゝひとわたりよませたてまつり給にいたらぬくもなかつたくゝにかよはしよみ給へるさまつましるしのこらすあさましきまでありかたければさるへきにこそおはしけれとたれもくゝ涙おとし給大將はましてこおとゝおはせましかはときこえいてゝなき給殿もえ心つようもてなし給はす人のうへにてかたくなゝりとみきゝ侍しを子のおとなふるにおやのたちかはりしれゆくことはいくはくならぬよはひなからかゝ

る世にこそ侍けれなどの給ひてをしのこひ給をみる御師の心ちうれしくめいほくありとおもへり大將さかつきさし給へはいたうゑいしれておるかほつきいとやせくなり世のひかものにてさえのほとよりはもちあられす、けなくて身まつしくなむありけるを御らんしうる所ありてかくとりわきめしよせたるなりけり身にあまるまで御かへりみを給りてこの君の御とくにたちまちに身をかへたと思へはましてゆくさきはならふ人なきおほえにそあらんかし大かくにまいり給日はれうもんにかむたちめの御くるまともかすしらすつとひたりおほかた世にのこりたるあらしとみえたるに又なくもてかしつかれてつくるはれいり給へるくわさの君の御さまけにかゝるましらひにはたへすあてにうつくしけなりれいのあやしきものとのたちましりつゝきいたる座のすゑをからしとおほすそいとことほりなるやこゝにてもまたおろしのゝしるものともありてめさましかれとすこしもおくせずみはて給つむかしおほえて大かくのさかゆるころなれはかみなかしもの人我もくゝこのみちに心さしあつまれはいよく世のなかにさえありはかゝしき人おほくなんありける文人擬生などいふなる事ともよりうちはしめすかゝしうはて給へはひとへに心にいれて師もてしもないとゝはけみまし給殿にもふみつくりしけくはかせさい人ともところえたりすへてなに事につけてもみちくゝの人のさえのほどあらはるゝ世になむありけるかくてきさきる給へきを齋宮女御をこそはゝは宮もうしろみとゆつりきこえ給しかはとおとゝもことつけ給源氏のうちしきりきさきにゐ給はんこと世の人ゆるしきこえすこうきてんのまつ人よりさきにまいり給にしもいかゝなとうちくゝにこなたかなたに心よせきこゆる人くゝおほつかなかりきこゆ兵部卿宮ときこえしはいまは式部卿にてこの御時にはましてやんことなき御おほえにておはする御むすめほいありてまいり給へりおなしこと王女御にてさふらひ給をおなしくは御はゝかたにてしたしくおはすへきにこそははゝきさきのをはしまさぬ御かはりのうしろみにとことよせてにつかはしかるへくとりくゝにおほしあらそひたれとなをむめつほる給ぬ御さいはひのかくひきかへすくれ給へりけるを世の人おとろききこゆおとゝ太政大臣にあかり給て大將内大臣になり給ぬよのなこのことゝもまつりこち給へくゆつりきこえ給人からいとすくよかにきらくゝしくて心もちゐるなどもかしこくものしたまふかくもんをたてゝし給ければゐんふたきにはまけ給しかとおほやけことにかしこくなむはらくゝに御ことも十よ人おとなひつゝものし給ふもつきくゝになりいてつゝおとらすさかへたる御いゑのうちなり女は女御といまひと所なむおはしけるわかとをりはらにてあてな

るすちはおとるましかれとそのは、君あせちの大納言の北方になりてさしむかへる子とものかすおほくなりてそれにませてのちのおやにゆつらむいとあいなしとてとりはなちきこえ給ひて大宮にそあつけきこえ給へりける女御にはこよなく思おとしきこえ給つれと人からかたちなどいとうつくしくそおはしける冠者の君ひとつにておひいて給しかとをのくとおにあまり給てのちは御かたとにてむつまじき人なれとおのこ、にはうちとくまじき物なりとち、おと、きこえ給てけとをくなりたるをおさな心に思ふことなきにしもあらねははかなき花もみちにつけてもひ、なあそひのついせうをもねんころにまつはれありきて心さしをみえきこえ給へはいみしうおもひかはしてけさやかにはいまもはちきこえたまはす御うしろみとも、なにかはわかき御心とちなれはとしころみならひ給へる御あはひをにわかにもいか、はもてはなれはしたなめはきこえんとみるに女君こそなに心なくおはすれとおとこはさこそものけなきほと、みきこゆれおほけなくいかなる御なからひにかありけんよそくになりてはこれをそしつ心なくおもふへきまたかたおいなるてのおいさきうつくしきにてかきかはしたまへるふみともの心おさなくてをのつからおち、るおりあるを御かたの人くはほのくしれるもありけれとなにかはかくこそとたれにもきこえんみかくしつ、あるなるへしどころくの大きやうとも、はて、世中の御いそきもなくのとやかになりぬるころしくれうちしておきのうは風もた、ならぬ夕くれに大宮の御かたにうちのおと、まいり給てひめ君わたしきこえ給て御ことなどひかせたてまつり給宮はよろつのもの、上すにおはすれはいつれもつたへたてまつり給ひはこそ女のしたるににくきやうなれとらうくしきものに侍れいまの世にまことしうつたへたる人おさく侍らすなりにたりなにのみこくれの源氏などかそへ給て女のなかにはおほきおと、の山さとにこめをき給へる人こそいと上手とき、侍れもの、上すの、ちに侍れとすゑになりて山かつにてとしへたる人のいかてさしもひきすくれけんかのおと、いと心ことにこそ思ひてのたまふおりく侍れこと事よりはあそひのかたのさえはなをひろうあはせかれこれにかよはし侍こそかしこれひとりことにて上すとなりけんこそめつらしきことなれなどのたまひて宮にそ、のかしきこえ給へはちうさすことうゑくしくなりにつけりやとの給へとおもしろうひきたまふさいはひにうちそへて猶あやしうめてたかりける人なりやおいのよにもたまつらぬ女こをまうけさせたまつりてみにそへてもやつしるたらすやむことなきにゆつれる心おきてこともなかるへき人なりとそき、侍なとかつ御ものかたりきこえ給女はた、心はせより

こそ世にもちゐらるゝ物に侍けれなど人のうへのたまひゐてゝ女御をけしうは  
あらずなに事も人におとりてはおひいてすかしと思給しかと思はぬひとにをさ  
れぬるすくせになん世はおもひのほかなるものとおもひ侍ぬるこの君をたにい  
かて思ふさまにみなし侍らんとう宮の御けんふくたゝいまのことになりぬるを  
と人しれす思ふ給へ心さしたるをかういふさいわい人のはらのきさきかねこそ  
又をひすきぬれたちいて給へらんにましてきしろふ人ありかたくやとうちなけ  
き給へはなとかさしもあらむこのいゑにさるすちの人いてものし給はてやむや  
うあらしとおとゝのおもひ給て女御の御ことをもゐたちいそぎ給しものをお  
はせましかはかくもてひかむることもなからましなどこの御ことにてそおほき  
おとゝもうらめしけにおもひきこえたまへるひめ君の御さまのいときひはにう  
つくしうてさうの御ことひき給を御くしのさかりかむさしなどのあてになまめ  
かしきをうちまもり給へはゝちらひてすこしそはみ給へるかたはらめつらつき  
うつくしけにてとりゆのてつきいみしうつくりたるものゝ心ちするを宮もかき  
りなくかなしとおほしたりかきあはせなとひきすさひ給ておしやり給つおとゝ  
わこむひきよせ給てりちのしらへのなかなかいまめきたるをさる上すのみたれ  
てかいひき給へるいとおもしろしおまへの木すゑほろゝとのこらぬにおいこ  
たちなどこゝかしこの御木丁のうしろにかしらをつとへたり風のちからけたし  
すくなしとうちすし給て琴のかむならねとあやしくものあはれなる夕かな猶あ  
そはさんやとて秋風樂にかきあはせてさうかし給へるこゑいとおもしろければ  
みなさまゝおとゝをもいとうつくしとおもひきこえ給にいとゝそへむとにや  
あらむ冠者の君まいり給へりこなたにとて御木丁へたてゝいれたてまつり給へ  
りおさゝくたいめむもえたまはらぬかなゝとかくこの御かくもんのあなかな  
らんさえのほとよりあまりすきぬるもあちきなきわさとおとゝもおほししれる  
ことなるをかくをきてきこえ給やうあらんとは思たまへなからかうこもりおは  
することなむ心くるしう侍ときこえ給てときゝはことわさし給へふゑのねに  
もふることはつたはるものなりとて御ふゑたてまつり給いとわかうおかしけな  
るねにふきたてゝいみしうおもしろければ御ことゝもをはしはしとゝめておと  
ゝはうしおとろゝしからすうちならし給てはきか花すりなとうたひ給大殿も  
かやうの御あそひに心とゝめ給ていそかしき御まつりことゝもをはのかれ給な  
りけりけにあちきなきよに心のゆくわさをしてこそすくし侍なまほしけれなど  
の給て御かはらけまいり給にくらうなれば御となふらまいり御ゆつけくたもの  
なとたれもゝきこしめす姫君はあなたにわたしたてまつり給つしいてけとを

くもてなし給ひ御ことのねはかりをもきかせたてまつらしといまはこよなくへ  
たてきこえ給をいとをしきことありぬへき世なるこそとちかうつかうまつる大  
宮の御かたのねひ人ともさゝめきけりおとゝいて給ぬるやうにてしのひて人に  
ものゝたまふとてたち給へりけるをやおらかいほそりていて給みちにかゝるさ  
ゝめきことをするにあやしうなり給て御みゝとゝめ給へはわか御うへをそいふ  
かしこかり給へと人のおやよをのつかからおれたることこそいてくへかめれ子を  
しるといふはそら事なめりなとそつきしろふあさましくもあるかなされはよお  
もひよらぬことにはあらねといはけなきほどにうちたゆみて世はうき物にもあ  
りけるかなとけしきをつふゝと心え給へとをとめていて給ぬ御さきをふこ  
ゑのいかめしきにそ殿はいまこそいてさせ給けれいつれのくまにおはしましつ  
らんいまさへかゝるあたけこそといひあへりさゝめきことの人のゝはいとかう  
はしきかのうちそよめきいてつるは火さの君のおはしつるところこそ思ひつれあな  
むくつけやしりうことやほのきこしめしつらんわつらはしき御心をとわひあへ  
り殿はみちすからおほすにいとくちおしくあしきことにはあらねとめつらしけ  
なきあはひに世人も思いふへきことおとゝのしるて女御をゝししつめ賜もつら  
きにわくらはに人にまさる事もやとこそ思ひつれねたくもあるかなとおほす殿  
の御なかのおほかたにはむかしもいまもいとよくおはしなからかやうのかたに  
てはいとみきこえ給ひしなこりもおほしいてゝ心うければねさめかちにてあか  
し給大宮をもさやうのけしきには御らんすらんものをよになくかなしくし賜御  
むまこにてまかせてみたまふならんと人ゝのいひしけしきをねたしとおほす  
に御心うこきてすこしをゝしくあさやきたる御心にはしつめかたし二日はかり  
ありてまいり給へりしきりにまいり給ときは大宮もいと御心ゆきうれしきもの  
におほあたり御あまひたいひきつくるひうるはしき御こうちきなとたてまつり  
そへてこなからはつかしけにおはする御人さまなれはまおならすそみえたてま  
つり給おとゝ御けしきあしくてこゝにさふらふもはしたなく人ゝいかにみ侍ら  
んと心をかれにたりはかゝしきみにはへらねと世に侍らんかきり御めかれす  
御らんせられおほつかなきへたでなくとこそ思ひ給ふれよからぬものゝうへに  
てうらめしと思ひきこえさせつへきことのいてまうてきたるをかうも思ふ給へ  
しとかつはおもひ給れとなをしつめかたくおほえ侍てなんと涙をしのこひ給に  
宮けさうし給える御かほの色たかひて御めもおほきになりぬいかやうなること  
にてかいまさらのよはひのすゑに心をきてはおほさるらんとときこえ給もさすか  
にいとおしけれとたのもしき御かけにおさなきものをたてまつりをきて身つか



らをは中／＼おさなくよりみたまへもつかすまつめにちかきかましらひなどは  
か／＼しからぬをみたまえなけいとなみつゝさりとも人となさせ給てんとた  
のみわたり侍つるにおもはすなることの侍ければいとくちをしうなんまことに  
あめのしたならふ人なきいうそくにはものせらるめれとしたしきほとにかゝる  
は人のきゝおもふところもあはつけきやうになむなにはかりのほとにもあらぬ  
なからひにたにし侍るをかの人の御ためにもいとかたはなることなりさしはな  
れきらく／＼しうめつらしけあるあたりにいまめかしうもてなさるゝこそおかし  
けれゆかりむつひねちけかましきさまにておとゝもきゝおほすところ侍なんさ  
るにてもかゝることなんとしらせ給てことさらにもてなしすこしゆかしけある  
ことをませてこそ侍らめおさなき人ゝの心にまかせて御らんしはなちけるを心  
うく思ふ給ふなどきこえ給にゆめにもしり給はぬことなればあさましうおほし  
てけにかうの給もことはりなれとかけてもこの人／＼のしたの心なんしり侍ら  
さりけるけにいとくちをしきことはこゝにこそましてなけくへく侍れもろとも  
につみをおほせ給はうらめしきことになんみたてまつりしより心ことに思ひ侍  
てそこにおほしいたらぬことをもすぐれたるさまにもてなさむとこそ人しれす  
思ひ侍れものけなき程を心のやみにまとひていそきものせんとはおもひよらぬ  
ことになんさてもたれかはかゝることはきこえけんよからぬよの人のことにつ  
きてきはたけくおほしの給もあちきなくむなしきことにて人の御なやけかれん  
とのたまへはなにのうきたる事にか侍らんさふらふめる人／＼もかつはみなも  
ときわらふへかめるものをいとくちをしくやすからす思ふたまへらるゝやとて  
たち給ぬ心しれるとちはいみしういとおしくおもふ一夜のしりうことの人  
／＼はまして心ちもたかひてなにゝかゝるむつものかたりをしけんと思なけき  
あへり姫君はなに心もなくておはするにさしのそき給へはいとらうたけなる  
御さまをあはれにみたてまつり給わかき人といひなから心おさなくものし給け  
るをしらていとかく人なみ／＼に思ける我こそまさりてはかなかりけれとて御  
めのとゝもをさいなみたまふにきこえんかたなしかやうの事はかきりなきみか  
との御いつきむすめものをのつからあやまつためしむかし物かたりにもあめれと  
けしきをしりつたふる人さるへきひまにてこそあらめこれはあけくれたちまし  
り給てとしころをはしましつるをなにかはいけなき御ほどを宮の御もてなし  
よりさしすくしてもへたてきこえさせんとうちとけてすくしきこえつるをおと  
としはかりよりはけさやかなる御もてなしになりにて侍めるにわかき人とても  
うちまきれはみいかにそやよつきたる人もおはすへかめるを夢にみたれたる所

おはしまさゝめはさらに思はらざりけることゝをのかとちなけくよししはしかゝることもらさしかくれあるましきことなれと心をやりてあらぬことゝたにいひなされよいまかしこにわたしたてまつりてん宮の御心のいとつらきなりそこたちはざりともいとかゝれとしもおもはれざりけんとの給へはいとおしきなかにもうれしくの給と思ひてあないみしや大納言殿にきゝ給はんことをさへ思ひ侍れはめてたきにてもたゝ人のすちはなにのめつらしきにか思ひたまへかけんときこゆ姫君はいとおさなけなる御さまにてよろつに申給へともかひあるへきにもあらねはうちなき給ていかにしてかいたつらになり給ましきわさはすへからんとしのひてさるへきとちの給て大宮をのみそうらみきこえ給宮はいとくゝおしとおほすなかにもおとこ君の御かなしさはすくれ給にやあらんかゝる心のありけるもうつくしうおほさるゝになさけなくこよなきことのやうにおほしのたまへるをなとかさしもあるへきもとよりいたう思つき給ことなくてかくまてかしつかんともおほしたゝざりしをわかゝくもてなしそめたれはこそ春宮の御ことをもおほしかけたためとりはつしてたゝ人のすくせあらはこの君よりほかにまさるへき人やはあるかたちありさまよりはしめてひとしき人のあるへきはこれよりおよひなからんきはにもとこそおもへと我心さしのまされはにやおとゝをうらめしう思きこえ給御心のうちをみせたてまつりたらはましていかにうらみきこえ給はんかくさはかるらんともしらてくわさの君まいり給へり一夜も人めしけうて思ふことをもえきこえずなりにしかはつねよりもあはれにおほえ給ければ夕つかたおはしたるなるへし宮れいはせひらすうちゑみてまぢよろこひきこえ給をまめたちて物かたりなときこえ給ついでに御ことにより内のおとゝのえんしてものし給にしかはいとなんいとおしきゆかしけなきことをしも思そめ給て人にもおもはせ給つへきか心くるしきことかうもきこえしと思へとさる心もしり給はてやとおもへはなんときこえ給へは心にかゝれることのすちなれはふと思ひよりぬおもてあかみてなに事にか侍らんしつかなる所にこもり侍にしのちともかくも人にましろなければうらみ給へきこと侍らしとなん思たまふるといとはつかしと思へるけしきをあはれに心くるしうてよいいまよりたにういし給へとはかりにてことゝにいひなし給ふついとゝふみなどもかよはんことのかたきなめりと思ふにいとなけかしうものまいりなとし給へとさらにまいらてねたまひぬるやうなれと心も空にて人しつまる程になかさうしをひけとれいはことにさしかためなともせぬをつとさして人のをもせずいと心ほそくおほえてさうしによりかゝりてゐたまへるに女君もめをさ

まして風のをとのたけにまちとられてうちそよめくにかりのなきわたるこゑの  
ほのかにきこゆるにおさなき心ちにもとかくおほしみたるゝにや雲井のかりも  
我ことやとひとりこち給ふけはひわかうらうたけなりいみしう心もとなければ  
これあけさせ給へ小侍従やさふらふとの給へとをとせす御めのとこなりけり  
ひとりことをきゝ給けるもはつかしうてあいなく御かほもひきいれ給へとあは  
れはしらぬにしもあらぬそにくきやめのとたちなとちかくふしてうちみしろく  
もくるしければかたみにをとせす

さ夜中にともよひわたるかりかねにうたてふきそふ萩のうはかせ身にしみ

けるかなとおもひつゝけて宮のおまへにかへりてなけきかちなるも御めさめて  
やきかせ給らんとつゝましくみしろきふし給へりあいなく物はつかしうてわか  
御かたにとくいてゝ御ふみかき給へれとこしゝうもえあい給はすかの御かたさ  
まにもえいかすむねつふれておほえ給女はたさはかれ給しことのみはつかしう  
て我身やいかゝあらむ人やいかゝおもはんともふかくおほしいれすおかしうら  
うたけにてうちかたらふさまなとをうとましとも思はなれ給はさりけり又かう  
さはかるへきこととおほさゝりけるを御うしろみともゝいみしうあはめきこ  
ゆれはえこともかよはし給はすおとなひたる人やさるへきひまをもつくりいつ  
らむおとこ君もいますこし物はかなぎとしのほとにてたゝいとくちおしとのみ  
思ふおとゝはそのまゝにまいりたまはす宮をいとつらしとおもひきこえ給北の  
方にはかゝる事なんとけしきもみせたてまつり給はすたゝおほかたいとむつか  
しき御けしきにて中宮のよそおひことにてまいり給へるに女御の世中おもひし  
めりてものし給を心くるしうむねいたきにまかてさせたてまつりて心やすくう  
ちやすませたてまつらんさすかにうへにつとさふらはせ給てよるひるおはしま  
すめれはある人ゝも心ゆるゑせするしうのみわふめるにとの給てにはかにま  
かてさせたてまつり給御いとまもゆるされかたきをうちむつかりたまてうへは  
しふゝにおほしめしたるをしゑて御むかへし給つれゝにおほされんをひめ  
君わたしてもろともにあそひなとし給へ宮にあつけたてまつりたるうしろやす  
けれといとさくしりおよすけたる人たちましりてをのつからけちかきもあいな  
きほとになりたれはなんときこえ給てにはかにわたしきこえ給宮いとあへな  
しとおほしてひとりものせられし女なくなり給てのちいとさうさうしく心ほそ  
かりしにうれしうこの君をえていけるかきりのかしつきものと思ひてあけくれ  
につけておいのむつかしさもなくさめんとこそおもひつれおもひのほかへた  
てありておほしなすもつらくなときこえたまへはうちかしこまりて心にあかす

おもふたまへらるゝ事はしかなんおもふたまへらるゝとはかりきこえさせしになむふかくへたて思たまふることはいかてか侍らむうちにさふらふか世の中うらめしけにてこの頃まかてゝ侍るにいとつれゝにおもひてくし侍れは心くるしうみ給ふるをもろともにあそひわさをもしてなくさめよとおもふたまへてなむあからさまにものし侍とてはくくみ人となさせたまへるをゝろかにはよも思ひきこえさせしと申給へはかうおほしたちにたれはとゝめきこえさせ給ふともおほしかへすへき御心ならぬにいとあかすくちおしうおほされて人の心こそうきものはあれとかくをさなき心ともに我にへたてゝうとましかりけることよ又さもこそあらめおとゝのものゝ心をふかうしり給なからわれをえんしてかくゐてわたしたまふことかしこにてこれよりうしろやすきこともあらしとうちなきつゝの給おりしもくわさの君まいり給へりもしいさゝかのひまもやとこのころはしけうほのめき給なりけり内のおとゝの御くるまのあれは心のおにゝはしたなくてやをらかくれて我御かたにいりゐる給へり内の大とのゝきんたち左少将少納言兵衛佐侍従たいふなといふもみなこゝにはまいりつとひたれとみすのうちはゆるしたまはす左兵衛督権中納言などもこと御はらなれと故殿の御もてなしのまゝにいまもまいりつかうまつり給ことねんころなれはその御こともゝさまゝまいり給へとこの君にゝるにほひなくみゆ大宮の御心さしもなすらひなくおほしたるをたゝこのひめ君をそけちかうらうたきものとおほしかしつきて御かたはらさけすうつくしきものにおほしたりつるをかくてわたり給なんかいとさうゝしきことをおほすとのはいまのほどにうちにまいり侍りて夕つかたむかへにまいり侍らんとていて給ぬいふかひなきことをなたらかにいひなしてさてもやあらましとおほせと猶いと心やましければ人の御程のすこしものゝしくなりなにかたはならすみなしてその程心さしのふかさあさゝのおもむきをもみさためてゆるすともことさらなるやうにもてなしてこそあらめせいさいさむともひと所にてはおさなき心のまゝにみくるしうこそあらめ宮もよもあなかにせいし給ことあらしとおほせは女御の御つれゝにことつけてこゝにもかしこにもおいらかにいひなしてわたし給なりけり宮の御ふみにておとゝこそうらみしたまはめ君はさりとも心さしのほとしり給らんわたりてみえ給へときこえたまへれはいとをかしけにひきつくるひてわたり給へり十四になんおはしけるかたなりにみえ給へといとこめかしうしめやかにうつくしきさまし給へりかたはらさけたてまつらすあけくれのもてあそひものに思ひきこえつるをいとさうさうしくもあるへきかなのこりすくなきよはひのほとにて御ありさま

をみはつましきことゝいのちをこそ思ひつれいま更にみすてゝうつろひ給やい  
つちならむとおもへはいとこそあはれなれとてなきたまふひめ君はゝつかしき  
ことをおほせはかほもゝたけ給はてたゝなきにのみなき給おとこ君の御めのと  
さい將の君いてきておなしきみとこそたのみきこえさせつれくちおしくかくわ  
たらせ給こと殿はことさまにおほしなることおはしますともさやうにおほしな  
ひかせ給ななどさゝめききこゆれはいよくはつかしとおほしてももの給は  
すいてむつかしきことなきこえられそ人の御すくせすくせいとさためかたくと  
の給ふいてやものけなしとあなつりきこえさせ給に侍めりかしさりともしけにわ  
か君人におとりきこえさせ給ときこしめしあはせよとなま心やましきまゝにい  
ふくわさの君ものゝうしろにいりゐてみ給に人のとかめむもよろしき時こそく  
るしかりけいと心ほそくてなみたおしのこひつゝおはするけしきを御めのと  
いと心くるしうみて宮にとかくきこえたはかりて夕まくれの人のまよひにたい  
めむせさせ給へりかたみにものはつかしくむねつふれてものもいはてなき給お  
とゝの御心のいとつられはさはれ思ひやみなんとおもへとこひしうおはせむ  
こそわりなかるへけれなとてすこしひまありぬへかりつるひころよそにへたて  
つらむとの給さまもいとわかうあはれけなれはまろもさこそはあらめとの給恋  
しとはおほしなんやとの給へはすこしうなつき給さまもおさなけなり御となふ  
らまいり殿まかて給けはひこちたくをひのゝしる御さきのこゑに人々そゝやな  
とをちさはけはいとおそろしとおほしてわなゝき給さもさはかれはとひたふる  
心にゆるしきこえ給はす御めのとまいりてもとめたてまつるにけしきをみてあ  
な心つきなやけに宮しらせ給はぬ事にはあらさりけりとおもふにいとつらくい  
てやうかりけるよかなとのゝおほしの給事はさらにもきこえす大納言殿にもい  
かにきかせ給はんめてたくともものゝはしめの六位すくせよとつふやくもほの  
きこゆたゝこのひやうふのうしろにたつねきてなけくなりけりおとこ君我をは  
くらゐなしとてはしたなむるなりけりとおほすに世の中うらめしければあはれ  
もすこしさむる心地してめさましかれきゝたまへ

くれなゐのなみたにふかき袖の色をあさみとりにやいひしほるへきはつか  
しとのたまへは

いろ／＼に身のうきほとんしらるゝはいかにそめける中の中もそとも  
の給はてぬに殿いり給へはわりなくてわたり給ぬおとこ君はたちとまりたる心  
ちもいと人わるくむねふたかりて我御かたにふし給ぬ御車三はかりにてしのひ  
やかにいそきいてたまふけはひをきくもしつつ心なければ宮のおまへよりまいり

給へとあれとねたるやうにてうきもし給はす涙のみとまらねはなけきあかし  
てしものいとしろきにいそきいて給ふうちはれたるまみも人にみえんかはつか  
しきに宮はためしまつはすへかめれは心やすき所にとていそきいて給なりけり  
みちのほと人やりならす心ほそく思ひつゝくるに空のけしきもいたうくもりて  
またくらかりけり

しもこほりうたてむすへるあけくれのそらかきくらしふるなみたかな大殿

にはことし五節たてまつり給なにはかりの御いそきならねとわらはへのさうそ  
くなどちかうなりぬとていそきせさせ給ふひんかしの院にはまいりの夜の人々  
のさうそくせさせ給ふ殿には大かたのことゝも中宮よりもわらはしもつかへの  
れうなどえならてたてまつれ給へりすきにしとし五節なととまれりしかさう

くくしかりしつもりとりそへうへ人の心ちもつねよりもはなやかにおもふへか  
めるとしなれは所々いとみていといみしくよろつをつくし給きこえあり按察大  
納言左衛門督うへの五節にはよきよいまはあふみのかみにて左中弁なるなん  
たてまつりけるみなとゝめさせ給て宮つかへすへくおほせことことなるとしな  
れはむすめをのくたてまつり給殿のまひひめはこれみつのあそんのつのか  
みにて左京大夫かけたるか女かたちなといをかしけなるきこえあるをめすか  
らい事に思ひたれと大納言のほかはらのむすめをたてまつらるなるにあそんの  
いつきむすめいたしたてたらむなにのはちかあるへきとさいなめはわひておな  
しくは宮つかへやかてせさすへく思をきてたりまひならはしなどはさにてい  
とようしたてゝかしつきなとしたしふ身にそふへきはいみしうえりとゝのへて  
その日の夕つけてまいらせたり殿にも御かたくのわらはしもつかへのすくれ  
たるをと御らんしくらへえりいてらるゝ心ちともはほとくにつけていとおも  
たゝしけなり御前にめして御らんせむうちならしに御まへをわたらせてとさた  
め給すつへうもあらずとりくくなるわらはへのやうたいかたちをおほしわつら  
ひていま一ところのれうをこれよりたてまつらはやなとわらひ給たゝもてなし  
よういによりてそえらひにいりける大かくの君むねのみふたかりものなとも  
みいれられすくむしいたくてふみもよまてなかめふし給へるを心もやなくさむ  
とたちいてゝまきれありき給さまかたちはめてたくをかしけにてしつやかにな  
まめい給へれはわかき女房などはいとをかしとみたてまつるうへの御かたには  
みすのまへにたにものちかうもゝてなし給はすわか御心ならひいかにおほすに  
かありけむうとくしけれはこたちなともけとをきをけふはものゝまきれにい  
りたち給へるなめりまい姫かしつきおろしてつまとのまにひやうふなとたてゝ

かりそめのしつらひなるにやをらよりてのそき給へはなやましけにてそひふし  
たりたゝかの人の御ほとゝみえていますこしそひやかにやうたいなどのことさ  
らひをかしき所はまさりてさへみゆくられはこまかにはみえねとほのいと  
よくおもひいてらるゝさまに心うつるとはなけれどたゝにもあらてきぬのすそ  
をひきならい給になに心もなくあやしとおもふに

あめにますとよをかひめのみや人もわか心さすしめをわするなとおとめこか

袖ふる山のみつかきのとのたまふそうちつけなりけるわかうをかしきこゑなれ  
とたれともえ思ひたとられすなまむつかしきにけさうしそふとてさはきつるう  
しろみともちかうよりて人さはかしうなれはいとくちをしうてたちさり給ぬあ  
さきの心やましければうちへまいる事もせずものうかり給を五節にことつけて  
なをしなとさまかはれる色ゆるされてまいり給きひはにきよなるものからま  
たきにおよすけてされありき給みかとりよりはしめたてまつりておほしたるさま  
なへてならす世にめつらしき御おほえなり五節のまいるきしきはいつれともな  
く心ゝになくし給へるをまひゝめのかたち大殿と大納言殿とはすくれたりと  
めてのゝしるけにいとをかしけなれとこゝしうつくしけなることはなを大殿  
のにはえおよふましかりけりものきよけにいまめきてそのものともみゆましう  
したてたるやうたいなどのありかたうをかしけなるをかうほめらるゝなめりれ  
いのまあひめともよりはみなすこしおとなひつゝけに心ことなるとしなり殿ま  
いり給て御らんするにむかし御めとまり給しおとめのすかたをほしいつたつの  
日のくれつかたつかはす御ふみのうち思ひやるへし

おとめ子も神さひぬらしあまつ袖ふるき世のともよはひへぬれはとし月の  
つもりをかそへてうちおほしけるまゝのあはれをえしのひたまはぬはかりのを  
かしうおほゆるもはかなしや

かけていへはけふのことゝそおもほゆる日影のしもの袖にとけしもあをす  
りのかみよくとりあへてまきはしかいたるこすみうすすみさうかちにうちま  
せみたれたるも人のほどにつけてはをかしと御らんす冠者の君も人のめとまる  
につけても人しれすおもひありき給へとあたりちかくたによせすいとけゝしう  
もてなしたれはものつゝましきほどの心にはなけかしうてやみぬかたちはしも  
いと心につきてつらき人のなくさめにもみるわさしてんやとおもふやかてみな  
とめさせ給て宮つかへすへき御けしきありけれとこのたひはまかてさせてあふ  
みのはからさきのはらへつのかみはなにはといとみてまかてぬ大納言もことさ  
らにまいらすへきよしそうせさせ給左衛門督その人ならぬをたてまつりてとか

めありけれとそれもとゝめさせ給つのかみは内侍のすけあきたるにとまうさせ  
たれはさもやいたはらましと大殿もおほいたるをかの人ばかり給ていとくちお  
しとおもふわかとしのほとくらゐなとかくものけなからすはこひみてまし物を  
おもふ心ありとたにしられてやみなん事とわさとのことにはあらねとうちそへ  
てなみたくまるゝおりくありせうとのわらは殿上するつねにこの君にまいり  
つかうまつるをれいよりもなつかしうかたらひ給て五節はいつかうちへまいる  
ととひ給ことしとこそはきゝ侍れときこゆかほのいとよかりしかはすゝろにこ  
そ恋しけれましかつねにみるらむもうらやましきをまたみせてんやとの給へは  
いかてかさは侍らん心にまかせてもえみ侍らすをのこはらからとてちかくもよ  
せ侍らねはましていかてかきんたちには御らんせさせんときこゆさらはふみを  
たにとてたまへりさきくかやうの事はいふものをとくるしけれとせめてたま  
へはいとおしうてもていぬとしのほとよりはされてやありけんをかしとみけり  
みとりのうすやうのこのまじきかさねなるにてはまたいとわかかれとおいさき  
みえていとをかしけに

日影にもしるかりけめやをとめこかあまのは袖にかけし心はふたりみる程

にちゝぬしふとよりきたりおそろしうあきれてえひきかくさすなそのふみそと  
てとるにおもてあかみてあたりよからぬわさしけりとにくめはせうとにけてい  
くをよひよせてたかそとゝへはとのゝくわさの君のしかくのたまうて給へる  
といへはなこりなくうちえみていかにうつくしき君の御され心なりきんちらは  
おなしとしなれといふかひなくはかなかめりかしなとほめてはゝ君にもみすこ  
の君たちのすこし人かすにおほしぬへからましかは宮つかへよりはたてまつり  
てまし殿の御心をきてみるにみそめ給てん人を御心とはわすれ給ふましきとこ  
そいとたのもしけれあかしの入道のためしにやならましなといへとみないそき  
たちにたりかの人ばかりふみをたにえやり給はすたちまさるかたのことし心にかゝ  
りてほとふるまゝにわりなくこひしきおもかけにまたあひみてやと思ふよりほ  
かのことなし宮の御もとへあひなく心うくてまいり給はすおはせしかたとしこ  
ろあそひなれし所のみ思ひいてらるゝ事まさればさとさへうくおほえ給つゝま  
たこもり給へり殿はこのにしのたいにそきこえあつたてまつり給ける大宮  
の御世ののこりすくなけなるをおはせすなりなんのちもかくおさなきほどより  
みならしてうしろみおほせときこへ給へはたゝの給まゝの御心にてなつかしう  
あはれに思ひあつかひたてまつり給ほのかになとみたてまつるにもかたちのま  
ほならずもおはしけるかなかゝる人をも人はおもひすて給はさりけりなど我あ



なかにつらき人の御かたちを心にかけて恋しとおもふもあちきなしや心はへのかやうにやはらかならむ人をこそあひおもはめと思ふまたむかひてみるかひなからんもいとをしけなりかくてとしへ給にけれと殿のさやうなる御かたち御心とみ給うてはまゆふはかりのへたてさしかくしつゝなにくれともてなしまきはし給めるもむへなりけりと思心のうちそはつかしかりける大宮のかたちこにおはしませとまたいときよらにおはしこゝにもかしこにも人はかたちよきものとのみめなれ給へるをもとよりすぐれさりける御かたちのやゝさたすきたる心地してやせやせに御くしすくなゝるなとかかくそしらはしきなりけりとしのくれにはむ月の御さうそくなと宮はたゝこの君ひと所の御ことをましることなういそいたまふあまたくたりいときよらにしたてたまへるをみるものうくのみおほゆれはついたちなどにはかならずしも内へまいるましう思ひ給ふるになにゝかくいそかせ給らんときこえ給へはなとてかさもあらんおひくつをれたらむ人のやうにもの給かなとの給へはおいねとくつをれたる心ちそするやとひとりこちてうちなみたくみてゐる給へりかのことを思ならんといと心くるしうて宮もうちひそみ給ぬおとこはくちおしきゝはのひとたに心をたかうこそつかうなれあまりしめやかにかくなものし給そなにとかゝうなかめかちに思ひいれ給へきゆゝしうとの給もなにかは六位など人のあなつり侍めればしはしのことゝはおもふたまふれと内へまいるも物うくてなんこおとゝおはしまさましかはたはふれにても人にはあなつられ侍らさましものへたてぬおやにおはすれといとけゝしうさはなちておほいたれはおはしますあたりになやすくもまいりなれ侍らすひんかしの院にてのみなんおまへちかく侍りたいの御かたこそあはれにものし給へおやいまひと所おはしまさましかはなに事を思ひ侍らましとてなみたのおつるをまきらはい給へるけしきいみしうあはれなるに宮はいとゝほろくゝとなき給てはゝにもをくるゝ人はほとくゝにつけてさのみこそあはれなれとをのつからすくせゝに人となりたちぬれはをろかにおもふもなきわさなるを思ひいれぬさまにてもものし給へこおとゝのいましはしたにもものし給へかきりなきかけにはおなしことゝたのみきこゆれと思ふにかなはぬことのおほかるかな内のおとゝの心はへもなへての人にはあらずと世人もめていふなれとむかしにかはることのみまさりゆくにいのちなかさもうらめしきにおいさきとをき人さへかくいさゝかにても世を思ひしめり給へはいとなむよろつうらめしきよなるとてなきをはしますついたちにも大殿は御ありきしなければのとやかにておはしますよしふさのおとゝときこえけるいにしへのれいになすらへてあ

をむまひきせちゑの日内のきしきをうつしてむかしのためしよりもことそへて  
いつかしき御ありさまなりきさらきの廿日あまりすさく院にきやうかうあり花  
さかりはまたしき程なれとやよひは故宮の御忌月なりとくひらけたるさくらの  
いろもいとおもしろければ院にも御よいことにつくろひみかゝせ給ひ行幸に  
つかうまつり給上達部みこたちよりはしめ心つかひし給へり人々みなあを色に  
さくらかさねをき給みかとはあかいの御そたてまつれりめしありておほきお  
とゝまいり給おなしあかいをき給へはいよくひとつものとかゝやきてみ  
えまかはせ給人々のさうそくよういつねにことなり院もいときよらにねひまさ  
らせ給て御さまのよういなまめきたるかたにすゝませ給へりけふはわざとの文  
人もめさすたゝそのさえかしこしときこえたるかく生十人をめす式部のつかさ  
の心みの題をなすらへて御たい給ふ大殿のたらう君の心み給へきなめりおくた  
かきものともはものもおほえすつなぬふねにのりて池にはなれいてゝいとす  
へなけなり日やうくくたりてかくの船ともこきまひて調子ともそうする程の  
山かせのひゝきおもしろくふきあはせたるに火さの君はかうくるしき道ならて  
もましらひあそひぬへきものをと世中うらめしうおほえ給けり春鶯囀まふほと  
にむかしの花宴のほとおほしいてゝ院のみかとも又さはかりの事みてんやとの  
給はするにつけてそのよの事あはれにおほしつゝけらるまひはつるほにおと  
ゝ院に御かはらけまいり給

うくひすのさえつるこゑはむかしにてむつれし花のかけそかはれる院のう

へ

こゝのへをかすみへたつるすみかにも春とつけくる鶯のこゑ帥の宮ときこ

えしいまは兵部卿にいまのうへに御かはらけまいり給

いにしへをふきつたへたるふえ竹にさえつる鳥のねさへかはらぬあさやか

にそうしなし給へるよいことにめてたしとらせ給て

鶯のむかしをこひてさえつるはこつたふ花の色やあせたるとの給はする御

ありさまこよなくゆへくしくおはしますこれは御わたくしさまにうちくの

ことなれはあまたにもなかれすやなりにけんまたかきおとしてけるにやあらん

楽所とをくておほつかなければ御前に御ことゝもめす兵部卿の宮ひは内のおと

ゝ和琴さうの御こと院の御まへにまいりて琴はれいのおほきおとゝに給はりた

まふせめきこえ給さるいみしき上手のすぐれたる御てつかひものつくし給へ

るねはたとへんかたなしさうかの殿上人あまたさふらふあなたうとあそひてつ

きにさくら人月おほろにさしいてゝをかしきほとになかしまのはたりにこゝか

しこかゝり火ともしておほみあそひはやみぬ夜ふけぬれとかゝるつゐてに  
おほきさいの宮おはしますかたをよきてとふらひきこえさせ給はさらんもなさ  
けなければかへさにわたらせ給おともろともにさふらひ給きさきまちよろこ  
ひ給て御たいめんありいといたうさたすぎ給にける御けはひにもこ宮を思ひい  
てきこえ給てかくなかくおはしますたくひもおはしけるものをとくちおしうお  
もほすいまはかくふりぬるよはひによろつの事わすられ侍にけるをいとかたし  
けなくわたりおはしまいたるになんさらにむかしの御代のこと思ひいてられ侍  
とうちなき給さるへき御かけともにをくれ侍てのちはるのけちめも思ひたまへ  
わかれぬをけふなむなくさめ侍ぬる又／＼もときこえ給おとゝもさるへきさま  
にきこえてことさらにさふらひてなるときこえ給のとやかならてかへらせ給ひ  
ゝきにもきさきは猶むねうちさはきていかにおほしいつらむ世をたち給へき  
御すくせはけたれぬものにこそといにしへをくひおほす内侍のかんの君ものと  
やかにおほしいつるにあはれる事おほかりいまもさるへきおり風のつてにも  
ほのめききこえ給ことたえさるへしきさきはおほやけにそうせさせ給ことある  
時ゝそ御たうはりのつかさかうふりなにくれの事にふれつゝ御心になはぬと  
きそいのちなかくてかゝる世のすゑをみることゝとりかへさまほしうよろつお  
ほしむつかりけるおひもおはするまゝにさかなさもまさりて院もくらへくる  
しうたとへかたくそおもひきこえ給けるかくて大かくの君その日のふみうつく  
しうつくり給て進士になり給ぬ年つもれるかしこきものともをえらはせ給しか  
ときうたいの人わつかに三人なんありける秋のつかさめしにかうふりえて侍従  
になり給ぬかの人の御ことわするゝ世なけれとおとゝのせちにまもりきこえ給  
もつられはわりなくてなともたいめんし給はす御せうそこはかりさりぬへき  
たよりにきこえ給てかたみに心くるしき御なかなり大殿しつかなる御すまひを  
おなしくはひろく見所ありてこゝかしこにておほつかなき山さと人なをもつ  
とへすませんの御心にて六条京極のわたりに中宮の御ふるき宮のほとりをよま  
ちをこめてつくらせ給式部卿宮あけんとしそ五十になり給ける御賀の事たいの  
うへおほしまうくるにおとゝもけにすくしかたきことゝもなりとおほしてさや  
うの御いそきもおなしくめつらしからん御いへるにてといそかせ給年かへりて  
ましてこの御いそきのこと御としみのことかく人まひ人のさためなどを御心に  
いれていとなみ給経仏法事の日のさうそくろくなをなんうへはいそかせ給け  
るひんかしの院にわけてし給ことゝもあり御なからひましていとみやひかにき  
こえかはしてなんすくし給ける世中ひゝきゆする御いそきなるを式部卿宮に

もきこしめしてとしころ世中にはあまねき御心なれとこのわたりをはあやにく  
になさげなくことにふれてはしたなめ宮人をも御よういなくうれはしきことの  
みおほかるにつらしと思をき給事こそはありけめといとをしくもからくもおほ  
しけるをかくあまたかゝつらひ給へる人々おほかるなかにとりわきたる御思ひ  
すくて世に心にくゝめてたきことに思ひかしつかれ給へる御すくせをそ我い  
へまてはにほひこねとめいほくにおほすに又かくこの世にあまるまでひゝかし  
いとなみ給はおほえぬよはひのす糸のさかへにもあるへきかなとよろこひ給を  
北のかたは心ゆかすものしとのみおほしたり女御ゝましらひのほとなどにもお  
とゝの御よういなきやうなるをいよくうらめしとおもひしみ給へるなるへし  
八月にそ六条院つくりはてゝわたり給ひつしさるのまちは中宮の御ふる宮なれ  
はやかておはしますへしたつみは殿のおはすへきまちなりうしとらはひんかし  
の院にすみ給たいの御かたいぬるのまちはあかしの御かたとおほしおきてさせ  
給へりもとありける池山をもひんなき所なるをはくつしかへて水のおもむき山  
のをきてをあらためてさまゝに御かたゝの御ねかいの心はへをつくらせ給  
へりみなみのひんかしは山たかく春の花の木かすをつくしてうへ池のさまおも  
しろくすくておまへちかきせんさい五えうこうはいさくらふちやまふきいは  
つゝしなとやうの春のもてあそひをわさとはうへて秋のせんさいをはむらゝ  
ほのかにませたり中宮の御まちはもとの山にもみちのいろこかるへきうへ木  
ともをそへていつみの水とをくすましやり水のをとまさるへきいはほたてくは  
へたきおとして秋の野をはるかにつくりたるそのころにあひてさかりにさきみ  
たれたりさかの大るのわたりの野山むとくにけおされたる秋なりきたのひんか  
しはすゝしけなるいつみありてなつのかけによれりまへちかきせんさいくれた  
けた風すゝしかるへくこたかきもりのやうなる木ともこふかくおもしろくや  
まさどめきてうの花のかきねことさらにしわたしてむかしおほゆる花たちはな  
なてしこさうひくたになとやうの花くさゝをうへて春秋の木草そのなかにう  
ちませたりひんかしおもてはわけてむまはのおとゝつくりらちゆいてさ月の御  
あそひところにて水のほとりにさうふうへしけらせてむかひにみまやして世に  
なき上めともをとゝのへたてさせ給へりにしのまちはきたおもてつきわけてみ  
くらまちなりへたてのかきに松の木しけくゆきをもてあそはんたよりによせた  
り冬のはしめのあさしもむすふへき菊のまかきわれはかほなるはゝそはらおさ  
ゝなもしらぬみ山木ものこふかきなどをうつしうへたりひかんのころほひ  
わたり給ひとたひにとさためさせ給しかとさはかしきやうなりとて中宮はすこ

しのへさせ給れいのおいらかにけしきはまぬ花ちるさとそゝの夜そひてうつろ  
ひ給はるの御しつらひはこのころにあはねといと心ことなり御くるま十五御前  
四ゑ五ゑかちにて六位殿上人などはさるへきかきりをえらせ給へりこちたきほ  
とにはあらず世のそしりもやとはふき給へれはなにこともおとろくしういか  
めしきことはなしいまひとかたの御けしきもおさくおとし給はてしうの君  
そひてそなたはもてかしつき給へはけにかうもあるへきことなりけりとみえた  
り女房のさうしまちともあてくまけそおほかたのことよりもめてたかり  
ける五六日すきて中宮まかてさせ給この御けしきはたさはいへとこころせ  
し御さいはいのすぐれたまへりけるをはさるものにて御ありさまの心にくも  
りかにおはしませはよにおもく思はれ給へることすぐれてなんおはしましけ  
るこのまちくのなかのへたてにはへいともらうなととかくゆきかよはして  
けちかくをかしきあはひにしなし給へりな月になればもみちむらく色つき  
て宮のおまへえもいはすおもしろし風うち吹たる夕くれに御はこのふたにいろ  
いろの花もみちをこきませてこなたにたてまつらせ給へりおほきやかなるはら  
はのこきあこめしおんのおりものかさねてあかくちはのうすものかきみいと  
いたうなれてらうわたとのそりはしをわたりてまいるうるはしきしきなれ  
とわらはのをかしきをなんえおほしすてさりけるさる所にさふらひなれたれは  
もてなしありさまほかのにはにすこのましうをかし御せうそこには

心から春まつそのはわかやとの紅葉を風につてにたにみよわかき人御つ

かひもてはやすさまともをかし御返はこの御はこのふたにけしきいはほなと  
の心はへして五えうのえたに

風にちる紅葉はかろし春の色をいはねの松にかけてこそみめこのいはねの

まつもこまかにみれはえならぬつくりことゝもなりけりとりあへすおもひより  
給つるゆへくしきなどをおかしく御らんす御まへなる人くもめてあへりお  
とゝこの紅葉の御せうそいとねたけなめり春の花さかりにこの御いらへはき  
こえ給へこのころ紅葉をいひくたさむはたつたひめのおもはんこともあるをさ  
ししそきて花のかけにたちかくれてこそつよきことはいてこめときこえ給もい  
とわかやかにつきせぬ御ありさまのみところおほかるにいと思やうなる御す  
まひにてきこえかよはし給大るの御かたはかうかたくの御うつろひさたまり  
てかすならぬ人はいつとなくまきはさむとおほして神無月になんわたり給け  
る御しつらひことのありさまをとらすしてわたしたてまつり給ひめ君の御ため  
をおほせは大かたのさほうもけちめこよなからすいものくしくもてなさせ  
給へり